

ら孤立させない活動であり、「貧困の世代間連鎖」を防ぐ重要な取り組みになっている。

■反貧困学習に取り組む西成地区

また、大阪府立西成高校は「反貧困学習」に取り組んでいる。内容としては、①ダッカのストリートチルドレン②ワーキングプアについて③シングルマザーについて④パワーグラフ（自分の個人史の中での生きる力を表す）について⑤西成学習（西成差別について・西成のことを知ろう・西成高校ができた理由）⑥日雇い派遣について⑦知らないと損する労働基準法！といった具合だ。この一環として、野宿者問題についても学習している（ぼくも授業に行った）。西成高校は、それまで「反差別」という視点から人権学習を積み重ねてきたが、「反貧困」という軸で内容を組み直す必要を感じ、新たな取り組みをつくり上げてきたのだという。

■全国の西成化の中で西成に学ぶ

また、釜ヶ崎には「こどもの里」という子どもの施設（児童館）があって、地元の子どもたちの居場所として活動を続けている。この「こどもの里」には、児童相談所等から「子どもの野宿」のケースの相談がたびたびくるという。

たとえば、「1歳半の男の子と両親」が野宿していたケースがあった。その親子は父親の体の調子が悪く、失業して家賃が払えなくなり、何とかならないかと10日前に熊本から大阪に来た。大阪であちこちの福祉事務所に相談に行ったが、どこも「野宿の家族では相談に乗れない」と対応してくれず親子で野宿を続けた。そして子どもがカゼをひいて熱を出し、こどもの里に相談に来た。病院で診察を受けると、子どもは「即入院」になり、母親もつきそいで病院で宿泊することになった。父親も受診すると「仕事ができる状態ではない」という診断書が出た。こんな状態でも福祉事務所は「住居がないと生活保護がうけられない」と言う。そこで、釜ヶ崎にあるサポートハウス（生活相談も行うアパート）に無料宿泊を依頼して父親の住居を確保した。母親も病気がちというので母親の診断書もとり、福祉事務所に行くことにした。子どもの医療費についても、大阪市内の区役所の福祉事務所が対応することになった。2週間後、ようやく生活保護申請が受理され、親子で生活することになった。

ここで見たように、「受け皿の家族用施設がない」「野宿の家族では相談に乗れない」「行政ではできないことがない」と、福祉事務所や市役所に行っても門前払いにされてしまう。行政は「家族の野宿」について対応策を持っていないので、相談に行っても「お手上げ」になってしまうのだ。

こうした事例は極端に見えるかもしれない。しかし、不安定雇用問題について「全国の釜ヶ崎化」がすでに言われているように、子どもの貧困についても「全国の西成化」は十分にありえる。子どもが社会から排除されることを防ぐ取り組みを、西成区を1つの先例として考えるべき時期に来ているように思われる。

【参考文献】大阪府立西成高等学校「反貧困学習――格差の連鎖を絶つために」解放出版社、2009年